

第12回高知市総合教育会議 議事録（概要版）

- 1 日 時 令和2年8月24日(月)
開会：午後2時30分 閉会：午後4時30分
- 2 開催場所 アスパルこうち 4階 ホール
- 3 出席者
- (構成員) 高知市長 岡崎 誠也
高知市教育委員会 教育長 山本 正篤
委 員 谷 智子
委 員 西森 やよい
委 員 野並 誠二
委 員 森田 美佐
- (事務局) 総務部副部長 加藤 勝巳
総務部参事政策企画課長事務取扱 西成 英丈
- (市長事務部局)
- 高知市副市長 中澤 慎二
高知市副市長 松島 研
- (教育委員会事務局)
- 教育次長 弘瀬 健一郎
教育次長 貞廣 岳士
教育政策課長 島内 裕史
教育政策課長補佐 濱田 光
教育政策課総務担当係長 神岡 純子
学校教育課長 溝渕 隆彦
学校教育課学力向上指導監 岡本 伸浩
学校教育課指導主事 森田 やよい
教育環境支援課長 岩原 圭祐
教育環境支援課学校ICT担当副参事 和田 広信
教育環境支援課情報整備担当係長 中山 智広
教育研究所長 近森 夏彦
教育研究所教育支援センター長 吉本 恭子
教育研究所教育相談班長 清遠 咲織
人権・子ども支援課長 山中 浩介
人権・子ども支援課生徒指導対策監 中井 昭秀

- 4 議 題 (1) 学力向上対策について
(2) 不登校対策について
(3) G I G Aスクール構想の実現について

5 議事の経過

- 学力向上対策について，教育委員会事務局から【資料1】【資料2】【資料3】に沿って説明

- 議論

(谷委員)

コロナ禍で大変な中，教育課程の修了が見込める段階まで対応してきたことは素晴らしいと思う。また，【資料2】のように，カリキュラム・マネジメントによる教育計画の見直しや行事の精選など，各学校が注力してきた部分が見える化し，把握することは，大事なことだと思う。児童生徒の過重負担にならないように配慮しながら授業時数を確保することや，学校行事の中止の決定に当たっては，学校側は大変悩まれたと思う。

まずは今年度を乗り切るため，その時々で最適を模索しながら選択していくことと，今できることを地道に取り組んでいくことが必要である。

(岡崎市長)

例年であればこの時期に学校で開催されている地域の祭りなども中止となっている状況である。これから運動会や音楽会，体育祭が開催される時期になるが，例年どおりの開催は難しい部分もあるので，各学校で検討している状況だと思う。

(森田委員)

オンライン授業には，自分自身を客観的に見ることができることや他者との比較を通じて，自分の良さや，みんなの良さを分かり合えるという良い点がある。

親御さんが自宅勤務をしながら子どものICT学習を支援する状況も想定されるので，紙媒体とインターネット等を活用した勉強のバランスを考える必要がある。

オンライン化により生活リズムが乱れることも考えられる。時間を決めてオンラインで集まる，課題を出すだけではなくICTを活用したフィードバックを行うなど，工夫をして生活リズムを保つことも考えていかなければならない。

(西森委員)

新型コロナウイルスの感染拡大は，学校の役割を改めて考える機会となった。学校は，勉強を教えるだけでなく，文化について教養を深め，給食や部活等により児童生徒の健康づくりや体力づくりを促進し，そして子どもたちの思い出づくりの場となるなど様々な役割を担っている。新型コロナウイルスの感染防止対策に伴い，そうした学校の役割を

削ってきた中で、人々の価値観が変容し、これまでの課題が明らかになった。アフターコロナとなっても元の形には戻らない部分があると思う。

また、学校が唯一の学力保障の場である子どもたちもいる。そのような子どもたちの学びを保障するため、コロナ禍で見えた様々な課題を整理しておく必要がある。

(野並委員)

学びの保障も大事だが、遊びの保障も大事だと思う。運動会や音楽会を楽しみにしている児童生徒も多いと思うので、何らかの形で発表の場を設けていただきたい。

また、学会等でもオンライン化が進んでいるが、「集う」ことは大事だと思う。他者との関わりの中で自分が担う役割を確立していく部分もあると思う。

(山本教育長)

臨時休業期間中に補習学習を実施したところ、約6割の方にご参加いただき、一定の生活リズムや学びの機会の確保に寄与することができたと感じている。

また、学校に対する不安もある中で、学校現場では様々な感染症対策を講じながら学校再開をしていただいた。教育委員会としても国の様々な基準等を少しでも分かりやすい形で学校現場にお示ししたところである。自分の学校のために動画を配信していただいたということも聞いており、感謝申し上げます。

今後も予断を許さない状況にあるので、引き続き取組を進めるとともに学校現場で感染者が出たときの対応について、教育委員会として検討していく必要がある。

(学校教育課 溝淵課長)

一つの事例ではあるが、ある学校の教員からは、夏休みの期間が短縮したことについて子どもたちから疑問の声は一切ないとのことである。

また、学校行事については、子どもの意見を聞きながら実施の有無や内容について検討している学校もあり、このコロナ禍をどうやって皆で乗り越えていくのかについて教員と子どもがともに考えて、状況を克服するための力を身につけていっていると聞いている。

- 不登校対策について、教育委員会事務局から【資料4】に沿って説明

(岡崎市長)

様々な専門スタッフが、学校現場で意見交換をしながら支援をしている状況であり、教育研究所自体も立ち上げから約50年間、家庭の課題も含めて支援を行ってきた。

不登校は家庭環境や社会的な変化等、様々な要因があると思うが、まだまだ課題も多いと認識している。

(谷委員)

【資料4】は、高知市が取り組む不登校対策について予防と対策が良くまとめられている。不登校児童生徒の社会的自立をめざし、進路保障をいかにして充実していくかが重要だと思う。この教育支援センターを中心に、さらに取組の充実が図られることを期待している。

エンカウンターを実施している学校があるが、全ての子どもたちが友達と仲良く過ごし、笑顔が生まれる取組を行うことで状況が変わってくると思う。不登校を生じさせない学校づくりが求められている。

不登校対策において大事なことは三日待たないことである。各学校での連絡調整を図りながら、管理職を含めて休んでいる子どもを把握できる体制づくりを一層進めていただきたい。

教育研究所が発行しているリーフレット「ラポール」はタイトルも内容も良いので、これを基に各学校の先生方が協議する場を作っていただければ、不登校対策も進むのではないかな。

(野並委員)

不登校の児童生徒に対するバックアップが充実していると感じた。今後はこうした取組を広く周知していくことが重要である。誰もがこうした状況になる可能性があるので、親やこれから親になる人たちに知っていただき、すぐに相談や対応につなげていけるようにしていくことが必要だと思う。

(森田委員)

あまり交流はないがその時々で相談できる専門家と、困ったことがあったら話を聞いてくれる身近な方々、その両方の存在が必要だと思う。

多忙のため子どもの話を聞けない教員が約三人に一人いるという記事が新聞に載っていたが、不登校を未然に防ぐためには、身近な先生方に相談できる環境が必要だと思う。

(西森委員)

不登校については、非常に難しい問題だと考えている。

多くの現場ではご対応いただいていることと思うが、嫌なことを取り除くことや、保健室登校を責めないことが大事だと思っている。嫌なことは嫌だと寄り添い、居場所ができればある程度学校に行けるようになると思う。また、当事者や経験のある方が親身になって話を聞いてくれれば保護者もかなり安心すると思う。

(教育研究所 教育支援センター長 吉本)

本市や国としても不登校を減らす方向で進めていることは間違いないが、不登校が必要なケースもあると認識している。本市では、平成16年から不登校を生じさせない学校

づくりを進める中で、不登校の子どもをまず連れてくるのではなく、まず理解するという姿勢で教育活動を行っており、その子どもにとって学校が合っており、登校が望ましいケースについては、学校に来るためにどうすれば良いかという解決思考で取組を進めている。

(岡崎市長)

文部科学省もその辺りの考えはかなり変えてきている。一人一人の背景や状況を踏まえて丁寧に対応していくことが重要である。

- G I G Aスクール構想の実現について、教育委員会事務局から【資料5-1】【資料5-2】【資料6】に沿って説明

(森田委員)

今後、G I G Aスクール構想の実現に向けて取組を進める中で、教員のプロとしての定義が変わってくると思う。現在、様々なコンテンツがある中で、I C Tを活用しながら、コンテンツを見て、子どもたちに何ができて何ができなかったのかを分析し、コーディネート、ひいてはプロデュースしていくことが重要となる。

成績だけではなく、子どもに何を身に付けてもらいたいかを考える上で、教員が社会情勢を学び、批判的思考を養う必要があり、教科書に反映されていないリアルタイムの問題を取り扱うときに、コンテンツを精査する能力が求められていると思う。大変ではあるが、I C Tを活用することで先生方の負担が軽減される部分も出てくると思う。

(西森委員)

手で書く方が頭に入るという話を聞くが、手で書かなければならない部分とそうでない部分のバランスがあるのか、全てI C Tに移行するような形になるのか、その辺りを教えてほしい。

また、【資料6】に関連して、何か調べものをする際にインターネットでは限界を感じており、書籍や論文等だからこそ調べられる部分もあると思う。

教育現場において、書くにしても調べるにしても先生方が十分な知識を持った上で、生徒を指導していくことが重要である。

(野並委員)

家庭のインターネット環境によって入手できる情報量が違っており、格差が生まれるということを知ったことがある。今後も平等に何かを実施することが難しい背景が出てくると思う。

オンラインの場合は、質疑応答をその場でやりとりできないこともあり、双方向ではなく一方通行となる側面がある。たくさんの情報が入るため、要点が伝わりにくい部分も出

てくると思う。

(谷委員)

環境整備は整ったので、今後教員がいかにかこれらのツールを活用して教育効果を上げていくかという部分にバトンが渡されつつある。新しい教育様式あるいは新しい学習様式を身に付けていくような状況にあるが、従来の教科書や資料といったいわゆる紙媒体との併用という点で、G I G Aスクール構想におけるツールを含め、学習のツールが増えたと捉えた方が良いと思う。

(岡崎市長)

I C Tを使用する場面がいかに進んだとしても、教えるコツというのはあまり変わらないと思うので、単に機械を使いこなすだけではなく、先生方の教えるコツが重要になると思う。

(山本教育長)

ご意見のとおり、I C Tの整備は一定進んだが、これからは学校現場でいかに教員が使いこなせるのが課題となる。初めは導入に抵抗があった教員も、いざ活用すると負担が軽減したという声もある。また、授業の最後にタブレットで授業に関するまとめや意見を提出してもらうことによって子どもたちの理解度を把握するといった活用の仕方もある。そうした活用方法を検討し、先生方がうまく活用できるような情報提供に努めたい。

(教育環境支援課 和田学校 I C T担当副参事)

今後、子どもや先生方には、タブレットは鉛筆と同じような文房具であるという捉え方をしていただきたい。スマートフォンを使用されている方がたくさんいるように、できることから少しずつやっていこうという姿勢があれば、馴染んでいけると思う。学校の中にも情報教育のリーダー的な人材が必要だと思うので、そうしたことも視野に入れながら、取組を進めていきたい。

(岡崎市長)

I C Tは、教科書と同じようにあったら良いものではなく、なくてはならないという認識になっている。一番大事なことは、それを使ってどのように教えるかという根本的な問題であり、現場の先生方にもいろいろと研究していただきながら有効な活用方法について考えてきたい。

本日、重要な三つの議題について貴重なご意見をいただいた。

教育現場や我々を含め、本日いただいたご意見をそれぞれ整理しながら、子どもたちの家庭環境や背景はそれぞれ違うが、G I G Aに込められた「for ALL」という全ての子どものための取組ということ意識して、健やかな成長につなげていきたい。

● 閉会